



TITLE:

[紹介] 李後主の詞に関する討論

AUTHOR(S):

村上, 哲見

---

CITATION:

村上, 哲見. [紹介] 李後主の詞に関する討論. 中國文學報 1957, 7: 150-175

ISSUE DATE:

1957-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/176663>

RIGHT:

## 紹介

### 李後主の詞に關する討論

#### I

この數年來、中國の古典文學界が、いちじるしい活動を續けていることは周知のごとくであるが、このような動きが、とくに顯著となつたのは、だいたい一九五三年からで、この年の九月から十月にかけて開かれた、中國文學藝術工作者第二次代表大會（略稱第二次文代大會）は、その重要な契機とみてよいであらう。この大會における主要發言の一つである周揚（全國文學藝術界聯合會副主席）の報告の中に、古典文學の問題がとりあげられているが、この發言は、以後の古典文學研究についての基本方針を明確に示したものである（文藝報、一九五三年、二十三・四號）。

周揚はこの報告の中で、「民族的文學藝術遺産を系統的に整理し研究する」とは、われわれの文學藝術事業の上で、最も重要な任務の一つである。」と述べ、それは「一つには新しい文學藝術の創造を民族傳統と結びつけるためであり、同時に一方では、これらの民族的傳統的藝術を、科學的な整理、改造、加工を経て、ふたたび人民大衆の中に普及させ、今日の人民の、有益な、共同の精神的財産とするためである。」と述べている。そしてそこでは、更に具體的な問題について、いくつかのことが述べられているが、その中に次のような一節がある——「われわれが（文學藝術）遺産に對するには、必ず分析的態度をとらねばならない。われわれは遺産を區別なしに全部受けつぐのではない。必ず選擇して、その中の健康で、生命のある、人民に有益な部分のみを受けつぐでなければならぬ。まず第一に、遺産の中の、民主的進歩的な部分と、封建的落伍的な部分とを區別し、現實主義と反現實主義とを區別しなければならぬ。」——この數年來、古典文學研究において、人民的と反人民的、もしくは現實主義と反現實主義とを區

別することをもつて、あらゆる作品評價の唯一無二の基準とする傾向が、とくにいちじるしくなっているが、それは直接的には、この周揚の發言に端を發するようである。この周揚の發言は、文學藝術遺產の中の人民性と現實主義の傳統を、新しい創作活動の中に受け継ぎ發展させなければならぬというのが、むしろ主たる論旨であつたとおもわれるが、古典文學研究の領域においては、これが個々の古典作品に對する評價のしかたの問題として受け取られたようである。しかし、古典文學作品を、このような基準で區別選擇することができるものかどうか。實際には、これらの概念を、機械的さらには恣意的に、作品の内容にあてはめるような「研究」が盛行し、討論といえ、そのあてはめ方をめぐつて論議が紛糾するというような現象が顯著であつた。それはやがて、このような評價のしかたが妥當であるかどうかという反省に到達しなければならぬであらう。

第二次文代大會から約一年をへだてて、いわゆる「紅樓夢論争」が起つた（本誌第二冊參照）。この論争の過程において發表された數多くの文章あるいは討論會の發言の中に

## 紹介

は、小説「紅樓夢」の分析に、みるべき成果を示した論文もあつたが、「人民性」、「現實主義」などのことばをむやみにふりまわしたものもすくなかつた。この論争は、一九五四年九月にはじまつて、翌五五年春ごろまで繼續したが、これが民國時代の研究態度に對する批判にしばられて來たので、やがて問題はかつての「國故整理」の總帥である胡適に對する攻撃にうつり、更に胡風らに對する批判がはじまつたので、文學藝術界の話題の中心は、しばらくの間、古典文學の範圍をこえていた。しかし、古典文學をいかに理解し、評價するか、という問題は、紅樓夢をもつて終るはずのものではない。「紅樓夢論争」の途中で發表された王瑤の「古典文學研究事業の現狀を語る」（文藝報、一九五四年二十三・四號）では、共和國成立以來の古典文學研究の展開を次のように述べている。「第一段階は白居易、杜甫、水滸を代表とし、第二段階は李白、陶淵明、紅樓夢を代表とする。前の段階では、人々の理解の深さはさまざまであつても、これらの作品の人民性は字面の中に求めることができたから、論争は少なかつた。しかし、多くの問

題はおおほんとうに解決されてはいない。現在はこちらと第二の段階に當面しているようである。これらの作家作品を、人々はみな、肯定しなければならぬとは思っているが、いかに肯定するかということについては、さまざまにわかれてしまつた。なぜなら、これらの作品の人民性の表現は、複雑で曲折があり、具體的な精密な分析を要するからである。そのために、現在に至つてもなお討論しつづける段階のようである。第三段階は蘇軾、三國志などの作家作品であるかもしれない。なぜなら、これらはみな、人々が現在のところは困難を感じて、あえてたち向かうとしない問題であるから。ここにわれわれの古典文學研究領域の現在の水準が反映されており、同時にみなの人民性に對する理解に、なお狹隘な傾向があるということが、ある程度暴露されているようである。」——この文章から、王瑤の考えを察するに、研究の進展は、「人民性」の表われ方の單純なものから、順に複雑なものに及ぶ、いいかえれば、比較的簡單に「人民性」を指摘できるものから、次第にしにくいものに及ぶのであり、またそのようにして、

「人民性」の發見を次第におし廣めて行くべきである、といつてゐるかのようである。このような考え方が妥當であるかどうかはしばらくおき、「紅樓夢論爭」から少しく間をおいて、一九五五年の夏から、古典文學界の活潑な論議の對象となつたのは、五代の詞人、南唐後主李煜であつた。そして、一體この詩人には「人民性」があるのか、ないのか、討論に用いられた表現を借りるならば、「肯定」されるべきか、「否定」されるべきか、というようなかたちで提出され、論議されたのである。

註、王瑤のこの文章はのちに彼の論集「關於中國古典文學問題」(一九五六、九)に收録されたが、第三段階の三國志の前に李煜を加えている。

## II

唐末の騷亂時に、長江の下流一帯、淮南地方を支配したのは楊行密である。行密は盜賊から起つて淮南節度使となり、やがて吳王を稱した。行密の死後その子が順に位を襲いだが、實權は行密の部將徐溫の握るところとなつた。行密の第四子、楊溥が位を繼いだとき、徐溫もまた病死した。

溫の養子に知誥ちこうという男がいたが、知誥は溫の實子たちを壓倒して吳國の實權を手中に収め、まず楊溥を帝位に即かしたのちにその禪讓を受け（九三七）、舊姓に復して李昇しやうと名のり、國號を唐と稱した。これが五代における十のおもな地方政權、いわゆる十國のうちの南唐である。李昇は寬仁をもつて政を爲し、みずから勤儉につとめ、即位後は極度に兵事を避けて民力を休めたので、唐代から富裕をもつて知られたこの地方は、五代の混亂の中に、平和な文化的繁榮をほこつた。その範圍は、いまの江蘇、浙江、安徽、江西各省の大部分から、湖北、福建の一部に及んでいた。ついで立つた中主李璟けいは仁慈の人であつたが、優柔なために權臣たちの黨派の争いをおさめることができず、國勢は次第に衰へ、おりから後周の世宗の南征にあつて、長江以北の地をことごとく獻じ、帝號を去るという屈辱的な講和を餘儀なくされた（九五八）。やがて宋の太祖が周を篡よつたが、その壓迫はますます強く、李璟は傷心の中に世を去つた（九六一）。あとを受けて立つたのが後主李煜よである。煜は典型的ないわゆる三代目であつて、文學書畫音樂、

## 紹介

諸事通ぜざるはなき風流人であつたが、この國家艱難の機に臨んで爲すすべをしらず、ただ宴樂にふけつて一日の安きをむさぼるのみであつた。やがて宋の軍隊は長江を渡つて都の金陵（南京）を降し、南唐は亡んだ（九七五）。後主は汴梁べんりやう（開封）に拉致され、幽囚生活三年にして世を去つた（九七八）。年四十二。李煜には文集三十卷、雜說百篇の著作があつたというが、みな早く佚して傳わらず、彼が文學史上に名を留めるのは、ただ詞というジャンルにおいてである。

詞は、唐代に起つた樂曲の歌辭であるが、晚唐の詩人溫庭筠によつて、文學的な詩の一種として獨特の發育をとげ（本誌第五冊參照）、五代には、南唐と並んで比較的安定した地域であつた蜀（四川省）において、現存最古の詞集である「花間集」が編纂されている（九四〇）。李煜の詞は僅か三十首餘りであるが、「花間集」の詞人たちが語句に雕琢を凝らし、華麗濃艶を主とするのに對し、平易な用語をもつて感情を率直にうたつてゐる點で、詞の歴史に新しい展開をもたらし、ことに幽閉中の作と傳えられる數首は、悲

痛の情にみちた高い調べをもち、ひろく人々に愛誦され、また歴代の評論家たちにも高く評價されている。この討論中に發表された毛星の「李煜の詞について」ではその作品を三類に分つてゐるが、その分け方に従つて數首をあげておこう。

1、宮廷生活をうたつたもの、男女の交情をうたつたもの。

晚粧初了明肌雪。春殿嬪娥魚貫列。鳳簫吹斷水雲間。重按霓裳歌遍徹。臨春誰更飄香屑。醉拍闌干情味切。歸

時休照燭花紅。待放馬蹄清夜月。（玉樓春）

（晚粧初めて了して肌雪明らかなり、春殿の嬪娥魚貫して列す。鳳簫吹斷して水雲間なり、重ねて霓裳を按じて歌遍徹す。春に臨みて誰か更に香屑を飄えす、酔うて闌干を拍てば情味切なり。歸時には照らすを休めよ燭花の紅きを、馬蹄を放しいままにせんとす清き夜の月に。）花明月暗籠輕霧。今宵好向郎邊去。剗襖出香階。手提金縷鞋。畫堂南畔見。一向偎人顫。奴爲出來難。教君恣意憐。（菩薩蠻）

（花は明らかに月は暗く輕き霧の籠むる、今宵こそ好し

郎の邊へ向して去くに。剗襖にて香階に出るとき、手には提ぐ金縷の鞋。畫堂の南畔に見ゆれば、一向に人に偎りて顫う。奴は出て來ること難きが爲に、君をして恣意に憐おしましむ。）

2、別離の情、時節の感傷など、人生の哀愁をうたつたもの。

亭前春逐紅英盡。舞態徘徊。細雨霏微。不放雙眉時暫開。綠窗冷靜芳音斷。香印成灰。可奈情懷。欲睡朦朧入夢來。（採桑子）

（亭前に春は紅英を逐うて盡き、舞う態徘徊す。細雨霏微として、雙眉をして時暫も開かしめず。綠窗は冷靜にして芳音斷え、香印は灰を成す。可奈せんこの情懷の、睡らんと欲するとき朦朧として夢に入り來るを。）

次のごときは、この類ともいえるし。次の類と考えることもできる。

無言獨上西樓。月如鉤。寂寞梧桐深院鎖清秋。剪不斷。理還亂。是離愁。別是一般滋味在心頭。（相見歡）

（言も無く獨り西樓に上れば、月は鉤の如く、寂寞たり

梧桐しげる深き院の清秋を鎖させる。たち剪りて斷たれず、理えて還た亂るるは、是れ離愁。別にはれ一般の滋味心頭に在り。）

### 3、亡國の恨みをうたつたもの。

春花秋月何時了。往事知多少。小樓昨夜又東風。故國不堪回首月明中。 雕闌玉砌依然在。只是朱顏改。問君能有幾多愁。恰似一江春水向東流。（虞美人）

（春花秋月何時了、往事知ること多少ぞ。小樓に昨夜又も東風、故國のかた回首するに堪えず月明の中。

雕闌玉砌は依然として在るに、只だ是れ朱顏のみ改まりぬ。君に問う都べて幾多の愁有りやと、恰かも似たり一江の春水の東に向かつて流るるに。）

この、優雅なあるいは凄愴な、亡國の君主の詞が、人民性とどう結びつくのか。王瑤が第一段階としてあげた詩人、白居易、杜甫などは、常に廣い深い社會的關心を失なわず、そして文學的にも優れていた詩人である。しかし、文學の永い歴史には、極めて限られた範圍にしか關心を示さず、しかもそれなりに美しい輝やきを放つ詩人が稀ではない。

## 紹 介

李煜もその一人といえよう。「健康で、人民に有益な部分を選択する」という場合、この種の詩人たちがいかに遇されるか、それはこれまで全面的にとりあげられたことのない問題であつた。

## Ⅲ

一九五五年八月二十八日の光明日報副刊「文學遺產」六十九期に、「李煜『虞美人』の問題に關する討論」と題して、二篇の文章が掲げられた。そのきつかけは、遠く「紅樓夢論争」以前にさかのぼり、五四年四月十二日といえば、「文學遺產」が雙週刊（まもなく週刊になった）として發刊されてまもなく、その第四期に掲載された、詹安泰（中山大學教授）の「ソ連を學んでわれわれの古典文學教育を改めて行こう」という一文である。この文章そのものは、表題をみて内容を推すことができる程のもので、多くの人々には印象に残ることもなく忘れられたのではないかと想像されるが、その中に、古典文學中の優れた抒情作品の例として、李煜の虞美人詞（前項参照）をとり上げたことが、頗

ぶる一部の人のカンにさわつたようである。ここに載せられたのは、陳培治という人のこれに對する攻撃と、詹氏のそれに對する答である。陳氏はいう、「李煜は封建小國家の皇帝であり、金陵の宮殿で奢侈淫樂の生活を送つた。それは殘酷な搾取を基礎としてゐる。彼が虞美人詞においてなつかしんでいるのは、この罪多き搾取の生活なのである。そこにいう『故國』とは何か、それはかつて彼が殘酷に搾取し、荒淫無恥な生活を送つた、奴隸同様の人民と土地を指している。『雕闌玉砌』とは何か、それは無數の人民の血と汗とを費やして建築され、その中で彼が遊樂した宮殿である。『一江の春水の東に向つて流るる』に似ている『愁』とは何か、それは人民をして痛苦せしめた享樂的頹廢の生活に對する無限の懷思であり、『重ねて舊夢を溫めよう』という幻想である」と。更にことばを續けていうには、「現在新中國において、一部の人々はかつて舊社會において、殘酷な搾取によつて、享樂的頹廢の生活を送つていた。この詞が選ばれるということは、ちやうどこれらの人々の精神上のへうさばらし——發洩——となるであらう。」と。従つてこのような作品は有害なだけで、われわれの學習に値しない、古典文學教育の教材として適當でないといふのである。ここに抄譯した部分のみをみても知られるように、それは文學の論文というよりも、李煜という人物に攻撃を加えたにすぎないもので、「文學遺產」編輯部の加えた前おきによれば、編輯部ははじめ陳氏の原稿を送り返したのだが、陳氏がそれを人民日報に送つて討論を要求したので、編輯部は詹氏の意見を並載して、共同討論の便をはかつたのだという。そして更に、陳氏の研究態度及び方法はすべて非科學的である、詹氏の回答の中にも討論すべき點はあるが、基本的にはおおむね正しい、と評している。しかし、殘念なことは、詹氏の「陳培治同志に答える」という一文もまた、編輯部の後押しにもかかわらず、あまり説得力のある文章ではなかつた。その要旨は、李煜詞の主題思想は「國家民族の基礎より發する、生活實踐的な具體内容をもつた憂鬱と悲哀」である。詞の中には明らかに「故國不堪回首」とあるではないか。もし君主統治の國家を國家と認めないならば、過去の階級社會には根つか



ら國家というものが無いことになり、古典文學の中に愛國主義はないことになる。「大宋宣和遺事」に、徽宗皇帝が金の軍中に赴むこうとするのを百姓たちが泣いて引きとめる場面があるが、これによつて當時の君主と國家の關係を知ることができる。李煜も平時には奢侈淫樂の君主であつたが、國はろんでのちの故國をなつかしむ感情は、やはり南唐の人民たちと共通のものである、というようなことである。要するにこの二つの文章は、方向はいわゆる「肯定」と「否定」の正反對であるが、どちらも論文としては内容の乏しいものであつた。しかし、問題そのものはたちまち人々の關心を惹いたやうで、このあと一ヶ月餘りを経た十月九日の「文學遺產」七十四期に、李煜について二篇の論文が發表されたが、その編後記には、この間に全國から計十餘萬字の來稿があつたことが記されている。これからはじまつて、討論が一旦うち切られる翌五六年一月末までに「文學遺產」紙上に發表された論文を列擧しておくならば次のごとくである。

十月九日 七十四期

・ 紹介

楚 子 李後主及其作品評價

夏兆億 對李煜虞美人一詞的看法

十月十六日 七十五期

吳 穎 關於李煜詞評價的幾個問題

十二月十一日 八十三期

譚丕謨 我對於李煜詞討論的一些意見

十二月二十五日 八十五期

元貢石 也談李後主詞

五六年一月一日 八十六期

陳廣平 我對詞人李煜的看法

一月二十九日 九十期

游國恩 略談李後主詞的人民性

鄧魁英・聶石樵

關於李煜在文學史上的評價問題

このほか「關於李煜及其作品的評價問題」と題して、

十二月十八日 八十四期

北京師大中文系中國文學教研組

五六年一月二十二日 八十九期

北京大學中文系文學史教研組

の二つの討論會の記録が載せられている。

この討論全般を通じて顯著に現われてきた現象は、李後主の事蹟、あるいは南唐という國の事情から、彼の作品を説明しようという傾向である。ここではその甚だしい例として、吳穎の「李煜詞の評價に關するいくつかの問題」の概要を紹介する。

吳氏はまず第一節で、「評論家たちが李煜及び彼の詞に對して評論を加える際に、一つの共通の現象がある。それは、五代十國及び南唐の、具體的な歴史情況を全く理解していないことである。」とまあおきし、封建國家といつても、ある程度人民の要求に合致するものがあり、完全に人民と對立するものがある。五代の混亂に悲惨な生活を送つた人民たちはひたすらに安定を求めた。そして當時において南唐は最も安定した地域であつた。後主の祖父李昇は吳王の下に政柄をとつてより治績があり、北方の流民が大量に南唐に移り住んだ程であつた。その安定は地域的であり、一時的であつたにせよ、基本的に人民の要求と合致する。

しかし宋の統一は更に繼續的全國的な安定を人民に與えるものだから、南唐の滅亡は、一個の歴史現象として何ら惜しむに價しない。ただし宋の統一は、その直接に繼承した後周の政治經濟を基礎とするばかりでなく、一方では南唐、吳越、蜀などの經濟文化を基礎としてうちたてられたものであるから、「南唐の滅亡が惜しむに價しないからといって、八十年（四十年？）ほどの南唐の存在を、全くの歴史的錯誤と斷定することはできない。それは史的唯物論の精神に合致せず、また具體的問題について具體的分析をするという原則にも合致しない。」「そこで」と吳氏はいう。「李煜詞の中の南唐をなつかしみ、南唐の滅亡を悲しむ愛國的思想感情は、具體的歴史的根據があるばかりでなく、正當性をもつものである。」と。つづいて第二節では、李長之（『中國文學史略稿』第三卷、一九五五、二）らのように、李煜の、前期すなわち國主時代の作品は、後期、幽囚生活におけるすぐれた作品を生み出す技術的準備にすぎないとする見解に反撥し、前期の作品にも高い評價を與える。李煜には農業に意を用い、狩獵のたびに囚人の刑を減じ、切諫す

る臣下を賞したなどの史書の記載がある。また宋に對してはひたすらに辭を卑うして戰を避けつつひそかに軍備をととのえ、入朝を要求されたときには決然と拒絶した。また昭惠后及び弟の李從善に對しては深い愛情を示した。李煜が一面において荒淫皇帝であつたことは否定できないが、積極的な政治活動と嚴肅な生活というべき一面もある。そこで彼の前期の詞には頹廢的墮落的な面もあるが、大部分はやはりある程度の人民性があり、基本的には肯定されるべきである。嚴肅な愛情をうたつたもの、人生の哀愁をうたつたものなど（實例は略す）はやはり人民の思想感情に通ずるものがある、と。第三節は後期すなわち宋に幽閉されてのちの作品についてであるが、李煜が宋の太宗に毒殺されたという説から、彼が終始愛國者であり、不屈服者であつたとする。そして彼の後期の詞に愛國的思想感情があるかないかはもはや問題ではなく、それがどのような特徴をもち、どのように人民の思想感情と結びつくかが問題なのだという。祖國を愛し、家郷を愛し、平和な安定した生活を受する感情は人民と一致する。李煜がこれらのものを失

つた悲しみは激しく人民の共鳴を呼び起した。またそこには單なる悲哀のみでなく、激しい不平不滿のさげがある。彼が積極的な不屈服者であつたことも忘れてはならぬ。これらは李煜詞の積極的な社會意義であり、人民性の最も重要な面である。われわれはこれを更に高く評價しなければならぬ、と結論する。

その全體を通ずる論理を單純に云つてしまえば、南唐という國家及び李後主という人物の存在が肯定されるべきであるから、従つて李後主の作品も肯定されるべきだ、ということになる。この吳氏の論文は、作品や史書の記載の引用や解釋に粗雑なところがすくなくないので、そのような部分的な點では、そのあとずいぶん批判を浴びているが、李煜の人物ないしその環境を論ずることをもつて、作品研究におきかえようとする傾向は、程度の差はいろいろであるにせよ、ほとんどすべての論文にみられる。討論會にしても、十月十七日と三十一日の二回に分かつて行われた、北京師範大學における討論會の記録は、次の四つの項目に分けられている。（文學遺產八十四期）

1、荒淫皇帝というのが李煜の前期生活のすべての本質であるか、それとも、ある程度は人民の要求に合致する愛國的政治活動があつたかどうか。

2、李煜の詞は愛國思想を表現しているかどうか、そのいわゆる「故國」の具體的な内容は何か。

3、李煜詞は客觀效果の上からみて、人民性があるかどうか。

4、李煜の藝術風格に對する見方の問題

そして、紙面のわりあて方からみると、第一第二の項が重點的に論じられ、他は補足的に加えられたかのようである。「文學遺產」に發表された要旨は、あまりにも簡略にされているため、一人一人の發言の内容ははつきりつかめないが、とにかくすべてのテーマについて、肯定、否定の兩説があつたようである。しかし、最後に小結として、否定したものが肯定したものより多かつた、としている。どちらにしても、そこでは、作品そのものの分析が後に押しやられているように、私には思われる。これより約一ヶ月おかれて、北京大學で行われた討論會の記録は、次の五つ

の項に分つてゐる。

1、李後主を研究する方法の問題

2、李後主及びその作品中の愛國思想の問題

3、李後主及びその作品中の愛情生活の問題

4、李後主及びその作品中の感傷情緒の問題

5、李後主の作品の藝術評價の問題

第一に研究方法の問題がとりあげられているのは、この際とくに注目されてよい。ここで余冠英は「具體的作品より出發せず、南唐の政治の善惡を考えて、李後主詞の善惡を推論するものがあり、また、李後主を一般的な歴史人物として評價した上で、このような人物が立派な詞が書けるかどうかを推論するものがあるが、これは妥當でない。」といい、林庚及び力揚も、同様に、作品そのものについて論ずべきことをのべている。しかしまた一方、游國恩、吳組緜などは、作品研究には、まず作者の生活、社會環境、歴史背景が明らかにされねばならないことを、更に強調している。そして全體として最も重點的に論じられたのは、やはり愛國思想の問題らしく、「文學遺產」に發表された



距離のあるものではないし、並載された鄧魁英、聶石樵合著の論文は、李煜の前期の詞には價值をみとめず、後期の詞のみが高い人民性と愛國思想とをもつ、と論じているが、これは、この討論以前に刊行された李長之の「中國文學史略稿」第三卷の論述と大きな差はない。

このように方法論的にも、内容の上からも、大した進展がみられなかつたとすれば、討論がこごうち切られることは、いかにも心残りなことであつた。しかし、間もなくこの問題は再びとりあげられ、討論されることになつた。

#### IV

「文學遺產」編輯部が、李煜詞に關する討論を一應うち切ると表明してから一箇月を経ない、二月二十三日（以下日づけは一九五六年）、人民日報は毛星の「李煜の詞に關する討論を評す」と題する一文を掲載した。この文章は、これまで論文にみられた、作者の人物やその時代を考證することをもつて、作品の分析にすりかえようとする傾向を痛烈に批判して、これは「紅樓夢論争」において批判され

た「考據癖」と同質のものであると斷じ、そのような考證から直ちに李煜詞に眞摯な愛情、愛國主義、人民性などがあると結論づけるのは、牽強附會にすぎぬ、としている。

そして、李煜詞についての討論がこのように紛糾したのは、文化遺産として受けつぐべき作品は、すべて愛國主義と人民性を有しなければならぬと考えるからで、そのために、これらの概念をもつて作品を審査して、作品の善惡を判定しようとする傾向があらわれた。人民性ゆたかな、偉大な作品が、われわれの文學遺產の主體であるのは勿論であるが、だからといって、それ以外の作品はすべて反動であるということにはならないし、また、一の作品にとるべき點があれば、どうしても人民性のレッテルをはりつけねばならぬというものでもない。このような簡單化、公式化の傾向は、文學研究の健康な發展のために克服しなければならぬ、と結んでいる。毛星のこの文章は、紙面の都合もあろうけれども、李煜詞そのものの分析にはなお論述の粗なところがあり、部分的にはこのあといろいろ批判もされたが、その主旨はこの討論に新しい展開を導くものであつた。こ

の文章は、翌月の新華半月刊（八十號）及び光明日報「文學遺產」（九十五期、三月十一日）にも轉載され、大きな反響を呼んだ。五月六日「文學遺產」百三期に許可の「李煜の詞に關する討論を評す」を讀む」が掲載されたが、これは毛星の文章に對して部分的な批判におわり、大して重要でない。これに續いて、同紙百四・百五期に（五月十三日、二十日）、三月八日、十五日の兩日に行われた、北京大學文學研究所古代文學研究組の集體討論の記録が發表された。前おきに發言者十七人の名が列擧されているが、その中には、「紅樓夢論爭」において批判を集中された俞平伯・王佩章の名もみえる。百四期の方には余冠英ほか七氏の、毛星の論文に對する批判を主とする發言の要旨と、毛星のそれに對する意見を載せているが、百五期の方は専ら討論第二日、五月二十日の何其芳の發言の紹介に充てている。これは毛星の提出した意見をふまえつつ、作品分析など毛星の文章において不備であつた、もしくは明晰を缺いた點を補ない、かつ討論第一日にこれに對して出されたさまざまな批判に對する答えを含み、論旨は極めて明快である。次

## 紹介

にその内容の概略を示す。まず李煜詞を次のように分類する。（實例は略す）

1、宮廷生活を反映するもの。これらは概ね富貴の繁華氣に、風雅な興趣を添えたものである。勿論高い思想性があるとはいえないが、また反人民的、反動的ということもできない。

2、男女生活、女性のすがたを描寫したもの。別離の情を普遍的な表現で描寫したものは容易に人人の共鳴を得る。

しかし感情の強烈さにおいては、亡國の恨みをうたつたものには及ばない。また女性のものおもしろい、女性のすがたを描いた、すぐれた作品があるが、これらはいわば女性を描いた繪畫のごときものであつて、反人民的ときめつける必要もないし、人民性を求められるものでもない。故宮博物館に珍藏されている繪畫が、これまでなら論争を起したことはないのに、なぜこれらの作品だけが、人民性とか反人民的とか論議されねばならないのか。

3、亡國の恨みを描いたもの。これは李煜詞の中では、最も思想性がある。しかし、愛國主義その他高度の思想

とはいえない。花間集に比べれば、その境界はやや大きくなり、人生に對する深い感慨がある。しかし、中國文學全體からみれば、なお境界は小さく、感情は浅いといわねばならない。

4、その他の詞、あまり重要でない。漁父の詞を引いて、李煜が皇帝となることを厭つたという人があるが、あやまりである。清の畢沅は總督でありながら、靈岩山人と號し、徐世昌（民國初期の總統）は水竹村人と號した。これらによつて、彼らが大官僚となるまいとしたといふことはできない。

このように分析してみると、李煜詞のすがたはほぼ明らかとなる。彼の詞は決して高度の思想性を有するということとはできない。しかし、その別離の情、人生の憂愁のごときは、普遍的に存在した典型的な事物であり、だから歴代讀者の共鳴を得たのである。またこれらの内容は、藝術的に、よく表現され、人を動かすものがある。李煜詞の藝術的成果の主要な點は次ぎのごとくである。

1、高度の概括性。人生における典型的な、共通の、人を

動かし易いものを概括した。李煜の憂愁は人民のそれと具體的内容は同じでないが、その高度の概括性のゆえに、人は共鳴を覚え、その差異を感じないのである。

2、強度の形象性。愁、恨などは、みな抽象的なものであるが、「恰かも似たり一江の春水の東に向かいて流るるに」、「たち剪りて斷たれず、理えて還た亂るるは、是れ離愁。」などのごとき形象的表現方法を用いて、人人にその深長にして斷たれざる愁恨を具體的に感じさせる。

3、語句が精練され、優美で、自然である。辭藻をつみかさねた形式主義の作品とは全く異なる。

4、形式の和諧、完整。格律の拘束を感じさせない。

ある人人は、李煜詞のように久しく傳承された作品は、必らず思想性と藝術性とが一致しているというが、それは事實と合致しない。私は次のような作品が存在しうらう。

1、思想性も藝術性も、ともに高いもの。屈原、李白、杜甫の詩歌。水滸、紅樓夢等の小説。

2、思想性は高くないが、反動でもなく、人民の共鳴を起



しうるところがあり、藝術性は高度なもの。李煜詞。

3、藝術性は高いが、思想のよくないもの。ボードレールの詩。

4、思想性、藝術性のともに低劣なもの。

(註、ここで思想はよいが、藝術性のともなわないものを取りあげてもよいと思うが、それには觸れていない。)

では李煜詞は現實主義の作品か、人民性はあるのか、ないのか。彼の作品の中のすぐれたものは、現實主義の特徴をそなえている。反映している生活は狭小であるが、眞實性と典型性がある。眞實性と典型性を有する作品は、現實主義と認めねばならぬ。では人民性はどうか。人民性は決して李煜詞の特徴ではない。人民性を現實主義の條件とすることはできない。そのような考え方は、人民性の概念を曖昧にしてしまつてあろう。ある人人は李煜詞が好きなのに、それに人民性がないというと不安で、些細な點に人民性を主張するが、マルクス主義者が事物を観察し、研究し、分析するのは、その主導的方面、主要特性、規律を明らかにするためであつて、あらゆる些細な部分を、同等に

## 紹介

重視することではない。李煜詞に人民性が全然ないか、というような問題に、大きな力を費やして論争するのは、煩瑣哲學の氣味があるように感じられる。たとえば形式主義の作品でも、強いて捜求すれば現實主義的要素をみつけることはできるだろう。だからといつて、それが形式主義の作品でないとはいえないのである。また、李煜詞に人民性はないが、反人民的でもない、というのは、レーニンのいわゆる「二種の民族文化」のほかに、第三の文化を認めることになるという人があるが(この討論第一日における褚斌傑の發言)、このような見解は、マルクス主義の經典的著作を、いかにして正確に理解し、引用するか、という問題を含んでいる。この「二種の文化」の説は、資産階級的民族文化の説に對抗するためのもので、文化遺産繼承の問題についていわれたことではない。われわれは、この説から、過去の封建社會、資本主義社會における、統治階級の文化がすべて無價値である、と結論することはできない。それどころか、レーニンは、人類の思想文化の二千年以上の發展の中から、價値ある一切のものを、攝取し改造すべきことを

再三強調している。マルクス主義の經典的著作の中の具體的結論や片言隻句に對し、それが如何なる問題に對して提出されたか、その主要精神は何か、ということをかまわずに、生半可にそれをもつて新しい問題を解決しようとするのは、典型的な教條主義的態度である。

次に古典文學を研究するに、歴史材料をいかにとりあつかうか、という問題を論ずる。當時の社會の一般的情況、南唐の李煜個人の情況などは、當然研究されなければならぬ。しかしそれは一つの目的、すなわち、李煜の詞を理解し、評價する、という目的のためでなければならぬ。

歴史材料の研究は、決して文學作品そのものの研究にとつて代わるものではない。毛星のこの點についての批判は正確である。また、研究論文をかくのに、材料を羅列してその論文の主要内容としてはならない。酒は穀物から醸造するが、穀物を盃に盛つてもそれは酒ではない。

このあと七月二十二日「文學遺產」百十四期に、王仲聞の「李煜詞の考證問題について」が發表された。五代から

宋初にかけての詞の作品には、作者についての疑義が多く、また同一詞についての異文も多い。王氏の論文は、これまでの論者が、この點にほとんど注意をはらっていないことを批判したもので、考證のための考證であつてはならないが、基礎材料の検討は、やはり大切である、と主張し、李煜の作と傳えられながら、一方に異說のあるものを、たんにねんに拾つて表にしている。「紅樓夢論争」において、いわゆる「煩瑣考證主義」が批判されたあとだつたためでもあろうか、事實これまでの論文には、李煜の作かどうか疑わしいもの、更には李煜の作でないことがほぼ確定的なもの（更漏子「金雀釵、紅粉面。」のごとき）をも、平然と引用して論をすすめ、基礎研究がおろそかであることを示しているものがすくなくなつたから、王氏のこの文章は、討論の流れに直接参加するものではないが、その忠告は、この際とくに有益なものであつた（王仲聞氏は、このうち「南唐二主詞校訂」〔北京 一九五七年六月〕の著述を出版した）。

續いて八月五日「文學遺產」百十六期には、中山大學中文系中國文學史研究組の討論會の記録が掲載された。これ

は五月二十九日と六月五日の二回にわたつて行われ、この討論の發端をなした文章の筆者である、詹安泰教授が主持したと前おきにあり、詹氏ほか七人の發言の要旨が録されている。それらは全體としては、毛・何兩氏の提出した意見に賛成しながら、これに部分的な批判を加えたかたちになつてゐる。ただその中で、詹氏が「李煜詞に愛國主義と人民性があるかないか、という問題については、以前には多くの人人が肯定したが、毛星の文章が發表されてからは、一般に否定的な態度がとられるようになった。この問題を、どのように理解すべきか、今に至るまで、私にはよくわからない。」といつてゐるのは、正直な發言とおもわれて興味深い。これに續けて、「いかに、レーニン及びソ連大百科全書の説く原則を運用して、わが國古代社會の人民の愛國主義に對する見方と、古典文學の作家作品の中にある愛國主義思想とを説明するか、それは更に深く研究せねばならぬ。」とあるので、「わからない」という原因がわかるような氣がする。

九月九日「文學遺產」百二十一期には、「李煜の詞に關

紹介

する討論——來稿綜合報告」が掲載された。これは毛星の論文が發表されて以後、およそ五ヶ月の間に寄せられた、三十餘萬字にのぼる原稿を、編輯部が分類して概略をまとめたものである。これによれば、李煜詞をめぐる諸問題は、依然紛糾して歸するところをしないものようである。この報告は三項に分けられている。

1、李煜の詞に愛國主義及び人民性がそなわつてゐるかどうか。愛國主義については、毛星らの意見を支持して、沒落皇帝の過去を懷思する感情を愛國主義ということとはできないとする者が一方、郷土を愛する感情はやはり愛國主義に通ずるものである、あるいは、愛國主義の内容は歴史條件によつて變化するものであり、もしも統一中國に對するものだけが唯一の愛國主義とするならば、楚の國を愛した屈原の愛國主義精神も否定されねばならないであろうなどという論者もあとをたないようである。次に人民性についても、藝術の人民性は、作品の題材ではなく、作品と人民とのつながり、作家が人民の現實生活中の喜怒哀樂を表現しているかどうかにあるが、李煜は決してそのよう

な作家ではない、とする説がある一方、郷土を懷思する情、男女間の愛情を詠じたものは、ある程度の人民性がある、もしくは人民性の要素があるという説も、衰へてはいない。注意すべきは、編者の附言として、この問題について論議が紛糾しているのは、みな人民性の概念に對する理解がばらばらであるためだ、と指摘していることである。

2、李煜詞は、なぜ長い間讀者に愛されたか。毛星はこれを、李煜詞の哀愁は人民のそれと實質的には別のものであるが、ある面では類似がある、と説明しただけだったので、やはり多くの批判が出たらしい。しかし、これに代る説として、許可（先出）が、作品自體の本質にかかわりなく、人民たちは自己の意識にもとづいて理解し、これを自己の精神的財産たらしめるのである、といったのは、主觀的唯心主義の論調だ、と評されている。別の説は、「形象は思惟より大なり」の論にもとづき、作品の形象が作者の狭小な世界をはるかに突破している、というもので、多くの人が、ベリンスキーの「偉大なる詩人が〈私〉を語るとき、それは普遍的な事物、人類を語っているのだ」という言を

引用している。ただ、李煜詞が藝術的に大へん高い成功を示しているから、という見方はみな一致している。

3、李煜詞の藝術性と思想性。この點については、何其芳の北大文學研究所の討論會における發言に同意するものも多かつたが、思想性に乏しいという見方に反對するものもすくなくない。しかし、その反對は、この報告によるかぎり、作品の藝術性とは、その思想内容と不可分のものであり、單に造字鍊句の技巧をいうのではない。したがつて、李煜詞に深い思想内容がないとすれば、藝術性もありえない、という風な抽象的な論理にとどまるようである。

最後に、この討論において現われた注意すべき點を四つあげて、しめくくりとしているので、左に譯出する。

「1、討論の一年間に、李煜詞に對する全面的な、深刻な、具體的な分析を行なつた文章は、やはり一篇も見いだせなかつた。

2、ある人人は、李煜詞を分析する際に、作品中の事件と作家の生活に起つた事物とを、むやみに一緒にしてしまつてゐるが、これは妥當でない。

3、李煜詞を研究するとき、まず彼の平生の事蹟、時代背景を明らかにすることは、やはり必要であり、これを誤まりとするのは公平でない。

4、毛星が『李煜の詞に關する討論を評す』の中で研究方法に對して批評したが、これは正しい。人人はみな、これが今回の討論を一段と推進したばかりでなく、古典文學研究の水準を高めるうゑに意味があつた、と認めた。」

この九月九日の綜合報告をもつて、「文學遺產」紙上における、李煜の詞についての討論は、事實上うち切られてゐる。

しかし、この月に出版された、北京大學文學研究所編「文學研究集刊」第三冊には、毛星の「李煜の詞について」が發表された。これは、さきに人民日報その他に發表された文章を補訂したというよりも、さきの文章が討論についての批評を主とするのに對し、これは彼自身の李煜詞研究といつてよいであらう。これまでに提出されたさまざまな意見を、とるべきはとり、批判すべきは批判し、一年有餘の討論において發表された多くの文章の中では、おそらく

最も充實した内容をもつ。次にその概略を紹介する。

1、これまでの論文に缺けていた、作品考證から論を起し、ほぼ李煜の作を確認されるものを三十二首とし、これを三類に分ける。これには、さきの王仲聞の論文を十分に利用しているようである。實例はすでに第Ⅱ項において紹介したから省く。

2、李煜詞の内容は、さきには帝王生活、のちには囚徒生活という、個人的な、狭小な範圍を出ることがない。王國維（人間詞話）が李煜詞を評して、「釋迦キリストの、人類の罪惡を荷うの意がある。」というのは、とんでもないでたらめだ。漁父の詞をひいて、煜に退隱の志ありとする説も當たらぬ。ある人は、詞という文學形式が、もともと小さな感情しか描くことができないのだ、と辯護するが、蘇軾、辛棄疾らの作品をみれば、そうでないことがわかる。このことは、愛國主義、人民性の問題に關連してくる。詞中の「故國」、「家國」、「江山」などを摘出して、愛國主義思想がある、という人があるが、李煜の懷思する往事が、宮廷の享樂生活であり、故國が彼の王朝であることは明ら

かだ。また、レーニンは「愛國主義とは、千年百年このかた固められてきた、みずからの祖國に對する、深厚な感情である」といつた。わが國では秦漢以來、統一中國のみがみずからの祖國であるという觀念が固定されている。わずか四十年ばかりの地方政權たる南唐に、もともと愛國主義などありうるはずがない。また人民性についても、そのようなものはないと斷言できる。幽閉中の作に、反抗性、不屈服性があるというが、事實は、めそれと自己の境遇を訴えているにすぎない。また、宮廷生活、男女の情を描いたものも、とくに眞摯なる愛情と稱揚すべきものではない。要するに、李煜詞の思想感情は、とくに悪いともいえないが、少なくとも尊崇すべきものではない。李煜詞を論ずる際に、この思想内容上の缺點と限界は、決してゆるがせにしてはならない。

3、人民性はないが、反人民的でもないものを認めるのは、レーニンの「二種の民族文化」の説に反する、という批判も正しくない。なるほど、階級社會においては、階級を超越した人間は存在しないが、しかし、人には直接階級闘争

に参加するほかに、参加すべき別の生活が、發すべき別の感情がありうる。たとえば、個人間の情愛や、自然界の美しい事物に對する愛賞などは、必ずしも人民のあるいは反人民的な立場と、直接關連があるものではない。王維の「渭城の朝雨輕塵を<sup>こ</sup>おす」、張繼の「月落<sup>こ</sup>ち烏啼いて霜天に滿つ」、李白の「昔人已に黃鶴に乘して去る」等々の詩を、人民のあるいは反人民的などときめられるものであるうか。レーニンの「民族文化には常に二種ある」という説は、一九一三年に著わした「民族問題の批評についての意見」という文章の中にあるが、これは資産階級的、反動的民族主義思想を駁斥したもので、ここにいる「民族」とは、現代の民族であり、「二種の民族文化」とは、民主主義的、社會主義的文化と、資産階級的文化とを指すのであつて、このことばから、「人民の文學でなければ反人民の文學である」などということはできない。

4、李煜詞の内容上の特徴は、まず第一には、眞實の生活の眞實の感情を描いていること、もう一つは、過去を懷思し、人生を悲傷する咏嘆があることである。それが個人的

な、狭い範圍を出ないにしても、唐五代の他の詞人が、語句を雕琢して空虚な感情をうたつているのと比べると、李煜詞の最もすぐれた點である。王國維（人間詞話）の「詞は李後主に至つて、眼界始めて大に、感慨遂に深し」という言は、この意味においてのみ正しい。李長之（中國文學史略稿第三卷）が指摘したように、「無限の江山、別る時は容易に見ゆる時は難し」（浪淘沙）等の句が、日本帝國主義に華北を占據されたとき、青年たちの愛國的感情を刺戟したというのは、ありうることだが、このゆえに、李煜詞自体に愛國的感情があるということとはできない。ある人はこのことについて作者の主觀的意圖と作品の客觀的意義とは必ずしも一致しないといつて、紅樓夢の例をあげるが、作品の客觀的意義は、作者の意圖とは同じでないにしても、作品自体に客觀的にそなわつてゐるもので、讀者が勝手に附加し得るものではない。

5、李煜詞の人人に愛される所以は、上述の内容の問題だけでなく、その藝術的描寫をも重視せねばならぬ。まず第一に用語が素朴清新であること。これは晩唐五代の他の詩

## 紹介

人、詞人が、華麗な字句、晦澁な表現を好んだのに比べると、一、目瞭然である。次にその用語が極めて精練されていること。溫庭筠の詞などは、一句一句をみれば、たしかに簡潔に見えるが、一首全體としてみると、なお冗長な、ことばの積みかさねを感じる。李煜詞はたとえば菩薩蠻（花明月暗籠輕霧」第Ⅰ項参照）の一首は四十四字をもつて、環境氣分、人物のすがた、行動から微細な心理に至るまで、描きつくしている。内容はなんら稱するに足りないが、その藝術的描寫は十分に成功しているといえる。また相見歡（無言獨上西樓」同上）のごときは、わずか三十六字をもつて、淒涼寂寞の心情をいきいきと描き、人をしてかみしめてつけない味わいを覚えさせる。李煜詞のこうした言語上の優れた點は、新詩を書く人人も學ぶべきである。

6、李煜の詞には、その描き出す形象にも、獨自の特徴がある。たとえば、溫庭筠の菩薩蠻「小山重疊として金いろの明滅す、鬢の雲は度らんと欲す香腮の雪云々」が、化粧する女性を畫いてただ靜物畫のごとくであるのに對して、李煜の一斛珠「曉妝初めて過り、沈檀輕く注ぐこと些兒個

ばかり。」のごときは、いきいきした人物が畫かれている。また李煜は、雰圍氣を描き出すことにすぐれ、その雰圍氣の中に、人物の動作、心理は一層いきいきと浮かびあがる。たとえば、さきの菩薩蠻の中の「花は明らかに月は暗く輕き霧の籠むる」、相見歡の「寂寞たり梧桐しげる深き院の清秋を鎖せる」のごとき。また、もともと形のない哀愁をも、みごとな比喻をもつて具象化する。虞美人における「恰かも似たり一江の春水の東に向かいて流るるに」、浪淘沙における「流るる水落りゆく花春去りゆきぬ、天上人間。」のごとく。なおここで注意すべきは、これらの比喻は、一首全體の中に有機的に構成され、極めて自然に、いきいきと人に迫るものになっていることである。

7、以上の分析よりして、李煜詞に對する評價はおのずから一つの見方に到達する。彼の詞は、内容的には、眞實の生活を描いたという點で、同時代の他の詞人たちより一段ぬきんでいるが、そのほかには何等とくに推稱すべきところはない。しかし、その藝術的描寫の成功は極めて高いものである。ある人人は、一つの作品に高い藝術性がある

ならば、人民性がないということはありえぬ、とか、人民性が藝術性の最高標準である、とかいうが、それは思想性と藝術性とを混同した見方であつて、正しくない。毛澤東は文藝講話（延安文藝座談會における講話、選集第三卷）において「文藝批評には二つの標準がある。一は政治標準であり、一は藝術標準である」と明言しているし、ゴリキーはソ連作家第一次代表大會の報告において、ドストエフスキーを評して、その描寫の才能はシェクスピアのほかに比すべきものがないほどであるが、その思想には反動的なものがあることを述べている。李煜の作品を貴重な遺産とみなすべきは、その藝術描寫の卓越した成功のゆえである。李煜の作品をことさらに高く評價できないのはその反映している現實が極めて狭く、進歩的な思想内容、積極的な社會意義に乏しいためであり、ことさらに排斥すべきでないのは、何ら反人民的な思想そのほかの害毒をもたないからである。その思想感情の面から人を動かす力は、離愁別恨のごとく、一般の人人に共通の感情を描いたもののほかは、社會生活の變化によつて日に日に衰えつつある。この點で



は屈原、杜甫などの作品の思想感情が、永久に人人を感奮せしめ、人人に尊敬されるのは大いに異なるのである。

註、毛星のこの論文については、今年の「新潮」四月號に、すでに吉川教授の紹介がある。

## V

おわりにもう一度、第二次文代大會における周揚の發言をふり返つてみよう。「文學藝術遺産は、選擇して人民に有益な部分のみを受けつぐのでなければならぬ」という發言は、創作活動のうえに傳統を生かす、という意味ではほとんど問題はないであらうし、また、王瑤の「古典文學研究事業の現状を語る」の中に、抗美援朝運動たけなわのころ、民族意識を強調するあまりに、舊文化に對し「兼蓄併收」の傾向があつた、と記されているのを考えあわせれば、このようないい方が、ある偏向をただすためにとくに必要であつたろうと察しられるのであるが、その一方、別な偏向を生むべき可能性を内包していたとみることができる。それは恐らく、發言者の本意ではなかつたであらうけれど

## 紹介

も、古典文學の研究において、作品そのものを綿密に分析することを後廻しにして、人民のあるいは反人民的という尺度をおしあてて、性急にどちらかにきめてしまおうとする傾向が、次第に顯著になつてきており、また、作者がどのような人物で、どのようなことをしたかというようなことから、作品の價値をきめようとするやり方も、それにもなつて生じてきたものと考えられる。また、王瑤の「人が蘇軾や三國志に手をつけようとしたのは、人民性の理解が狭すぎるからだ云々」というようないい方も問題があつた。それは、すぐれた作品にはすべて人民性があることを前提とし、それを發掘して行くことが、すなわち研究の進歩であるかのように解されるからである。昨年ごろまで、古典文學研究が非常に盛んなようにみえて、實は、だれもかれもがとりあげる作家作品がある一方に、文學史上にかなり重要な存在でありながら、全く問題にされないものがすくなくなつた。このような現象も、上述のような傾向を考えるならば、いわゆる「人民性」を簡単に摘出することのできない作家作品に、人人が近づこうとしないの

は、當然のことと理解できる。毛星・何其芳が提出したような、文學の研究は、作品そのものを包括的に、綿密に分析して、その本質を探るのてなければならぬこと、人民的でなければ反人民のと簡単にわりきることとはできないこと、藝術性と思想性は必ずしも一致しないこと、その双方のそなわつたものが一流の作品であるのは當然だが、藝術的にすぐれているだけでも、それなりに文化遺産としての價值をもつこと、などの意見は、以上のような偏向をたえず意味で重要なものといわねばならない。「文學遺産」百二十二期の綜合報告をみると、肯定か否定か、どちらかにきめなければおさまらない人々や、片言隻句から人民性や愛國主義を拾ひ出そうとする人々が、依然として多いことが知られるが、これは、劃一的な公式主義をもつて方向を統一するやり方に比して、彈力性のある、中正な考え方を滲透させることが容易でないことを示しているよう。しかし、このような考え方が、一旦、明確に提出されたことは、この一連の討論の大きな成果であつたといつてよいであらう。

最後に一つ附け加えておくならば、最近、在北京各大學

の文學關係教授の座談會で、文學研究所長としての何其芳が、かなりはげしい調子で非難され、その一つに、毛星の論文を「文學遺産」に轉載したときのいきさつがあげられている（文藝報九號、一九五七、六、二、「教條主義和宗派主義阻碍着文學研究工作的開展」）。この論文が轉載されるとき、編輯部の按語として、毛星の批評は正しく、最初に李煜の虞美人詞についての討論をとりあげたとき、詹安泰の文章を基本的によいと評したのは妥當でなかつた、という意味のことが添えられていた。この座談會における余冠英の發言では、そのとき編輯部では、討議中の問題に、このような結論的な評を加えて、態度をはつきり示すのはよくない、という意見が強く、余冠英にこの按語の修改を依頼した。しかし何其芳の決定によつて、發表されたのは、もとのままの按語であつた。これは毛星の文章が、はじめ共產黨機關誌たる人民日報に發表されたために、何其芳が、このような按語が必要だと認めたのであつて、反對意見を十分に考慮していない。このようなやり方は、學術上の爭鳴を妨げるものだ、といつている（註、「文學遺産」は以前は作家協

會古典文學部によつて編輯されていたが、近頃、文學研究所に移管されたらしい。因みに別の非難をあげておくと、李長之は、何其芳は琵琶記討論（本誌第六冊參照）に結論を下し、表面上は肯定派と反對派の意見を綜合したかにみえるが、實質は討論會以前の議論に返したにすぎず、討論によつてなら進歩していない、といい、林庚は、この數年來、何其芳が獨自で、ある問題について書いた研究論文をほとんどみないが、多勢の人人が論文を書いた問題については、上は屈原から、下は阿Qに至るまで、みな何其芳が結論的な文章を書いてゐる。結論を出すことをもつて、學術の指導にすりかえることでは、何其芳は典型的である、といつてゐる。そこにはすでに理論的な問題をこえた微妙なものが感じられる。願わくは、早くこのような内部矛盾を解決して、文學研究に更に一そこの展開を示してもらいたいものである。（一九五七、七、三〇）

（京都大學 村上哲見）

〔附記〕 この稿の印刷がはじまつてから、「李煜詞討論集」と題する一書を手した（文學遺產編輯部編、北京、一九五七年

一月）。これには、ここに列擧した各論文、討論會記錄のほかに、「李煜詞的藝術評價問題討論」として中國作家協會上海分會古典文學組の討論會記錄と、ソ連大百科全書の「愛國主義」および「藝術上の人民性」の項を譯出したものを加えている。